

2020年8月30日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「主は、向こう岸へ」マタイ福音書8章18～34節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは、自分を取り囲んでいる群衆を見て、弟子たちに向こう岸に行くように命じられた」

(マタイによる福音書8章18節)

主イエスが宣べ伝えた「神の国の福音」は多くの人々に喜んで受け入れられる一方で、多くの戸惑いや反発を生みました。というのも、主イエスが語る福音は、当時の「常識」を問い直し、「タブー」に鋭く切り込むものだったからです。今朝、開いたマタイ8章でも、「向こう岸に行こう」という主イエスの言葉に戸惑い、恐れる弟子たちの姿が描かれています。「向こう岸」とはガリラヤ湖の「向こう岸」であり、ユダヤの人たちにとっては異教徒たちの住む「ケガレた場所」であって、「行ってはいけない場所」、「そこに足を踏み入れたなら、お前たちもケガれるぞ!」と教え込まれてきた土地でした。

しかし、主イエスはその人々の「タブー」を軽々と超えていかれます。同じマタイ8章の前半で、主イエスはローマの百人隊長の僕を癒していますが、主イエスにとっては、ユダヤ人もローマ人も神に分け隔てなく愛されている存在であり、時にはローマ人の方がユダヤ人より立派な信仰をもっていることさえあると教えられたのでした。ところが「ユダヤ人こそ神に選ばれし民族。ローマ人のようなケガレた連中とは違う!」という「選民思想」を幼い時から植え付けられてきた人びとにとって、この主イエスの言動は受け入れがたいものがありました。そして、その主イエスに弟子として従うとは、それぞれに「常識」や「タブー」との衝突、葛藤、戦いを日々抱えて歩むことを意味したのです。

例えば今朝のマタイ8章18節には「イエスは…弟子たちに向こう岸へ行こうと命じられた」とあります。「命じる」とはかなり強い言葉です。「行ってみようか」という相談ではありません。「向こう岸に行くぞ!」という主イエスの強い覚悟がにじみ出ています。その主イエスに「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」という弟子入り志願者がやってきまして、こう答えられます。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕するところもない」と。それは「今から『向こう岸』にわたる私に従う厳しさをお前はほんとうに理解しているのか?」という厳しい問いかけだったことでしょう。また弟子の一人が「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言うのですが、この言葉は18節につなげて読むべきでしょう。つまり「弟子たちに向こう岸に行くよう命じた主イエス」に対して、弟子の一人が「まず、その前に父を葬りに行かせてください」と応答したわけです。この人は「向こう岸に行く強い覚悟を示した主イエス」に怖気づき、「この人に従って行くとまずいことになる」と考えて、「まず父を葬りに…」とい

う、もっともらしい断りを入れたのかもしれないと想像するのです。

そして23節以降、向こう岸に行くために主イエスと弟子たちが乗り込んだ舟が激しい嵐に遭うのですが、弟子の中には「ほら、向こう岸に行くことを、神が怒られて、邪魔をされているに違いない」と思う者がいただろうなと想像します。神に喜ばれるよりも人びとの言葉を気にし、『あんなケガレた地に行きやがって』という非難の言葉を恐れる私たちがいるからです。しかし、そのような私たちの人間的な懸念、心配、恐れを打ち破って、主イエスは向う岸に進んでいかれます。湖の上を吹き荒れていた激しい嵐は主イエスの言葉で静まり、向こう岸の墓場を住みかとしていた二人の「狂人」、悪霊にとりつかれた者たちもまた、主イエスの言葉によって癒されていきます。湖のこちら側に住む者も、向こう側に住む者も、神が愛されている大切な一人ひとりであり、人間が造り出す「差別の境界線」を神の愛は超えていかれるからです。

ただ、これらのエピソードでもう一つ心に留めたいことがあります。それはここまで強い覚悟をもって行われた主イエスの「向こう岸」での伝道でありながら、残念なことに「向こう岸」の人々によって拒否されたという事実です。墓場を住みかとせざるを得ない二人が癒された喜びよりも、豚の大群を失う大きな経済的損失の嘆きを優先する人びとによって、主イエスの伝道活動は拒否されたのでした。湖の「向こう側に住む者」も「こちら側に住む者」も、いざとなれば一人の人間の救いよりも経済的利益を優先しようとする、神の前にはほんとうに罪深い、愛なき、救いがたい存在であることがここに示されています。

エフェソ 2 章 14 節以下の御言葉が響いていきます。「実に、キリストは私たちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し…双方を御自分において一人の新しい人を造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」。今朝の聖書で浮かび上がってくるのは、まず第一に、湖の「こちら側」と「向う側」を隔てている差別の壁を取り壊し「一人の新しい人」が造り上げられることを祈り願い、神の国の福音を宣べ伝えていかれる主イエスの姿です。同時に、その主イエスを理解できず、おじまどい、身勝手な理屈で神の子を否定し、十字架に追いやる私たち人間の救いがたい罪も示されています。このたび全世界が直面しているコロナ禍においても、まず自分たちを優先し、経済を優先し、感染者に対して激しい非難と排除の言葉を浴びせていく、ほんとうに罪深い私たちの姿が露呈しているわけですが、その私たちに拒否され続けても、私たちの間に平和になることを祈り、神の愛をもって執り成し続けてくださっている主イエスがおられます。私たちの歩みが、今日も「向こう岸へ行こう」と招かれている主イエスの愛に少しでも応えるものとなりますように、祈ります。